

先週私たちは、イコニオムとルステラで行われたパウロとバルナバの宣教について見ました。イコニオムでは、主を信じる人と信じない人とで、町が二派に分かれ、ルステラでは、生まれつき足のなえた人へのいやしを通して大きな騒ぎが起きました。それは、そのいやしの奇蹟を目撃した人々が、パウロとバルナバをギリシャ神話の神々としてあがめようとしたからです。それを知ったパウロは、彼らが自分たちにいけにえをささげるのを止めさせるために、こう言いました。「あなたがたが、そのようなむなしいことを捨てて、生ける神に立ち返るように、私たちは福音を宣べ伝えているのです」と。今日も、その続きを見ていきます。

19 節「ところが、アンテオケとイコニオムからユダヤ人たちが来て、群衆を抱き込み、パウロを石打ちにし、死んだものと思って、町の外に引きずり出した」。わずか一節だけですが、この時、大変なことがパウロの身に起こりました。彼が、人々から石で打たれたのです。どうぞイメージして下さい。もしこの時、パウロが死んでいたら、どうでしょう？パウロの宣教、つまり、異邦人への宣教は、ここで終わっていたかも知れないのです。でも幸いなことに、たぶん気絶していたのだと思われませんが、パウロは死なずに済みました。

20 節「しかし、弟子たちがパウロを取り囲んでいると、彼は立ち上がって町に入って行った。その翌日、彼はバルナバとともにデルベに向かった」。ここには「生き返った」とは記されていないので、パウロは、死んでなかったのです。もちろん、それは、彼が死んだふりをしたということではないと思います。人々が死んだと思うほどに、彼は限りなく、死の状態に近かった。ところが、ご自分の救いの計画と選びに基づいてパウロを異邦人の使徒として立てられた主は、死者の中からよみがえらすように、彼を立たせたのです。そのこと自体、驚きといえますが、さらに私が驚いたのは、その後、パウロが取った行動です。

彼は立ち上がった後、どうしましたか？「町に入って行った」。今まさに自分を石打ちにした者たちのいる町に、パウロは入って行ったのです。皆さん、どうですか？そんなことしたら、止めを刺されてもおかしくないでしょう。普通なら逃げるのではないですか？でもパウロは、町に入って行ったのです。それこそ彼が、迫害者たちや死を恐れていなかった証拠といえます。この時のパウロは、当然、体はあざだらけで、ひどい痛みを覚えていたことでしょう。一夜で治るようなものではないと思います。けれども、その翌日、彼はバルナバとともにデルベに向かうのです。それは、ルステラから南東約 40 マイルに位置する町でした。

21-22 節「彼らはその町で福音を宣べ、多くの人を弟子としてから、ルステラとイコニオムとアンテオケとに引き返して、22 弟子たちの心を強め、この信仰にしっかりとどまるように勧め、『私たちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なければならぬ』と言った」。デルベでも福音を宣べ伝えたパウロとバルナバは、ここでも多くの人を弟子とします。ここでの宣教についてはそれ以上のことは記されていませんが、でも、彼らを通して福音を聞いて信じた人々は、主につく者、主の弟子となったのです。

そのことがあって後、主への信仰がなければ、決して取れないような行動にパウロたちは出ます。つまり、彼らは「ルステラとイコニオムとアンテオケとに引き返して」行くのです。もしあなたがパウロと共に旅をしていたなら、この後も、彼らに同行したと思いますか？そこには、パウロを石打ちにした人たち、つまり、迫害者たちがいたのです。しかも彼らは、パウロたちを追って百キロ以上も旅するような執念深い人たちです。

パウロたちは、なぜそうしたのか？「弟子たちの心を強め、この信仰にしっかりとどまるように勧め」るためです。なぜそれらの町の弟子たちは、心強められる必要があったのか？そこには、パウロを石打ちするような反対者たちがいたからです。そして、その多くは、上流階級の者、つまり、有力者たちだったからです。これらの町の弟子たちは、そういった人々からの迫害を免れなかったでしょうから、パウロは、彼らを励ましてこう言ったのです。「私たちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なければならぬ」と。

このパウロのことばは、もしかしたら誤解を招くかもしれません。なぜなら、多くの苦しみを受けることが、神の国に入るための条件、つまり、救いの条件のように聞こえるかも知れないからです。でも、そうではありません。仮にそうだとすると、神の国に入るための苦しみを私たちはどう定義したら良いですか？どれだけ苦しめば、神の国に入れる者として認められるのでしょうか？パウロのように石打ちにされたらですか？

ここでパウロが語っていること、それは主イエスによって救われるなら、その人には主の御霊が与えられる。それによって力を受けるので、その人は、主の証人となります。いつ、いかなる時も主を証するようになるのです。でも、すべての人が主を受け入れるわけではありません。すでに見たように、反対者たち、つまり、自分を永遠のいのちにふさわしくない者と決める人たちがいて、そういう人たちは、主の弟子を迫害し、信仰を失わせようとするのです。当然、迫害は苦しみなわけですが、信仰者は、そのような苦しみを避けられない。

でも、パウロがそうであったように、私たちの救い主イエスは、聖霊とみことばを通して、ご自分に信頼し、聴き従う者と共にいて、いかなる時にも支えて下さいます。主が、最後までご自分に対する信仰を守らせて下さるのです。ですから、私たちは、すでに今の世において主の恵みによって救いを受けていても、救いの完成としての神の国にはまだ入っていないことができます。それがいつであるかは、それぞれ違うわけですが、最後まで主への信仰を守る者に、主は義の栄冠を与え、ご自分のおられる所に迎え入れて下さるのです。

ですから、繰り返しますが、主につく者は、その信仰のゆえに苦しみを受けます。それゆえに、苦しみに対して、「なぜ？」と問うのではなく、むしろ、それに備えるべきです。どのようにしてですか？パウロをして、自分の身の危険を冒してでも、それらの町々に引き返してしたこと、それは「彼らの心を強め、信仰にしっかりとどまるように勧めること」でした。みことばと祈りによって、パウロは彼らの心を強めたのです。そして、そのことが自分たちが去った後も続けられるために、町ごとに指導者たちを選びました。23節「また、彼らのために教会ごとに長老たちを選び、断食をして祈って後、彼らをその信じていた主にゆだねた」。

教会は、神の家族であり、お互いは兄弟姉妹です。そういう意味で、みな平等といえます。でも主は、それぞれに違った賜物や役割を与えることで、ご自分のからだである教会が、一つとなり、堅く立つことを望まれるのです。ここで教会ごとに選ばれた長老たちとは、「監督」や「牧師」とも言われますが、弟子たちの心が強められ、信仰にしっかりとどまり続けるために、主によって立てられた指導者たちです。

長老として選ばれる条件としては、テモテ書とテトス書といったパウロの手紙に記されていますが、執事と同様、その基本とするところは、その人がどういう人物であるか、つまり、その人の人格、主にある成熟さが問われています。ただ長老が、執事と違うところ、それは長老には「教えることができる」ことが求められるのです。なぜなら、私たちの心が強められ、主への信仰にとどまり続けるには、みことばが語られ、教えられる必要があるからです。「…信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによる…」からです（ロマ10:17）。そのようにしてパウロたちは祈り、彼らを主にゆだねて、そこを去ります。

24-26節「ふたりはピシデヤを通過してパンフリヤに着き、25 ペルガでみことばを語ってから、アタリヤに下り、26 そこから船でアンテオケに帰った。そこは、彼らがいま成し遂げた働きのために、以前神の恵みにゆだねられて送り出された所であった」。すでにこれまで地図を見て来たので、今日は見ませんが、パウロたちは、これまで来た道のりを引き返して行き、みことばを語った後、キプロス島には戻らず、最初に自分たちを送り出してくれたシリヤのアンテオケへと帰っていきます。そのようにして第一回伝道旅行を終えます。

27-28節「そこに着くと、教会の人々を集め、神が彼らとともにいて行われたすべてのことと、異邦人に信仰の門を開いてくださったこととを報告した。28 そして、彼らはかなり長い期間を弟子たちとともに過ごした」。アンテオケに着いたパウロたちは、教会の人々を集め、これまでの旅の報告をします。主に、二つのことが言われています。まず、神様が彼らとともにいて行われたすべてのことについて、そして、神様が異邦人に信仰の門を開いてくださったことについてです。

幾つかのことを心に留めたいと思います。まずこの伝道旅行は、神様の行われたことであるということです。つまり、船や徒歩でその長い距離を旅し、その町々の会堂や広場でみことばを語り、しるしや不思議を行い、また反対者たちの迫害に耐えたのは、パウロとバルナバですが、人々を救ったのは彼らではありません。それは彼らとともにいて、人々のうちに働きかけられた神様が、信じた者たちを救われたのです。ですから、私たちは主を証する時、どうしても能力や方法といったものにフォーカスしやうしいと思います。「私にはできません。わかりません」と。でも、そこで大事なものは、主がともにおられるかどうかということです。

この宣教旅行での出来事が、ペンテコステの後、エルサレムで起こった出来事とは違うところ、それは主の救いが、ユダヤ人たちにだけでなく、異邦人たちにももたらされた、ということです。それはパウロたちの向かった地域が、異邦人の地であったことからすると、当然のことといえるかも知れません。でも、これまで見て来たように、ユダヤ人たちにとって、異邦人が、ユダヤ教に改宗することなく、つまり、割礼を受け、律法を守ることなしに救われるということはありません。

でも、主は、ご自分が聖書を通して語っておられたように、パウロを異邦人の使徒として遣わすことで、彼を通して福音を聞いて信じる者を、ユダヤ人、異邦人に関係なく救われました。そのようにして、最初の頃にペテロたちに語られたことば、つまり、「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります」（使徒1:8）を主は実行されたのです。

もちろん、それで地の果てまで宣教が完成したわけではありません。この後も、パウロたちは、第二、第三と宣教旅行を続けます。そして、それは今日もまだ完成していません。それゆえに、今日も主の大宣教命令は、主を信じる者たち、主の弟子によって続けられているのです。けれども、それは必ず終わりを迎えます。その時、神の国に迎えられるのは誰ですか？「私はこれだけの苦しみを耐え忍びました」と、自分の正さや行いをもってその救いにふさわしいとする人ですか？いいえ。主イエスによって、その信仰が認められる人です。つまり、主イエスの愛を知り、その恵みによって救われることで、みことばを賛美し、喜びと聖霊に満たされて、心から主を愛し、従う人たちを、主はご自分のおられるところに迎えて下さるのです。

「私たちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なければならぬ」。その苦しみは、私たちが自分ひとりで耐え忍ぶものではありません。主イエスがともにいて下さるので、乗り越えられるものです。主は、私たちの経験するあらゆる苦しみを知っておられる方です。なぜなら、ご自身がその身をもって苦しみを経験して下さったからです。主にとって、むちで打たれ、茨の冠をかぶせられ、叩かれ、殴られ、つばきをかけられ、釘を打たれ、十字架にかけられ、何時間もそれにさらされることは、まさに苦しみであったと思います。

でも、何よりの苦しみは、「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と十字架上で叫びからもわかるように、ご自分と全く一つであった父なる神様との関係の断絶であったと思うのです。私たち、この罪の世に生きる者にとっては、そのことを本当の意味で理解することはできないでしょう。それほどまでに神様のことを知らず、この方と一つであることのすばらしさを知らないからです。でも、死を通して愛する人との別れを経験したことのある人は、それがどういうものかというのは想像できると思います。

主イエスは、自分の罪の結果として、当然滅びに至るべき私たちのために、父なる神様との関係の断絶という大きな苦しみを進んで味わって下さった。それによって、本当は捨てられるはずの私たちが、ご自分の贖いの死によって罪赦され、神の子どもとされることで、永遠に主とともに生きられるようになるためです。そこまでして、私たちが愛し、神の国に入れることを望まれる方が、ご自分の愛する者たちが、その信仰のゆえに苦しみを経験する中で助けて下さらないことがあるのでしょうか。主は、ご自分の名を呼ぶ者に必ず応えて下さいます。そして、聖霊とみことばを通して、いよいよご自身のすばらしさをわからせて下さることで、私たちの信仰がなくならないどころか、それを強め、神の国を、ご自分の来られるのを心から待ち望む者と造り変えて下さるのです。